

7 施設・設備等

【目標】

本学は、京都市の今出川キャンパスと京田辺市の京田辺キャンパスの2校地を有する。本学の教育課程の種類、学生数・教員数等の組織規模等を勘案すると2校地体制を維持していくことは、財政的に負担を強いるものであることは否めない。しかし、両キャンパスに設置されている学部・学科・研究科の特性を活かし、教育研究を遂行することは学生にとっても有益である。それぞれのキャンパスにおいて、教育効果が十分あげられるような施設・設備等を整備し学生の学修に供すると同時に、社会の様々な要請の変化に適切に対応するために絶えずその更新・充実を図り、その有効活用を目指す。

近年における大学の教育研究環境を決定するPC他各種情報機器の整備は、機械・設備等の整備に限らず、機器利用を補助するための人員配置を含め、学生や教職員がこれらを十分活用できるように努める。

(1) 学部・学科、大学院研究科における施設・設備等の整備

- 大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性 (A群)
- 大学院研究科の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性 (A群) 大学院

安全で快適に行われる教育研究や充実したキャンパスライフを支えるものとして、施設・設備の整備・充実は重要な課題である。本学の施設・設備等の整備計画は、常任委員会で提案・審議され、評議会、教授会の議を経て策定される。建物の新築等の大規模な整備計画については、常任委員会のもとにキャンパス整備委員会が組織され具体化が図られてきている。小規模な改修工事や設備の更新などについては、各部課の要求をふまえて担当課である施設課が予算化を図り具体化している。

校地面積の現況は、[大学基礎データ表 36]のとおり、京田辺キャンパス 136,644 m²、今出川キャンパス 23,749.04 m²を有している。また、校舎面積は、京田辺キャンパス 64,342.91 m²、今出川キャンパスに 29,096.04 m²であり、校地面積、校舎面積いずれも大学設置基準を充足している。また、講義室、演習室、実験実習室の現況については、[大学基礎データ表 36、表 37、表 38]のとおりであり、規模別の講義室・演習室使用状況については、[大学基礎データ表 40]のとおりである。

京田辺キャンパスでは、2005年度開設の薬学部医療薬学科の実験実習棟として憩水館新築工事（延べ床面積 7,124.10 m²、6階建て、高さ 28.05m）と教育研究・学術情報環境の

整備充実を図るための既存図書館棟の増築工事（延べ床面積 7,601.80 m²、6 階建て、高さ 28.50m）とが 2004 年 3 月に着工した。憩水館は、2005 年 3 月に竣工し、聡恵館増築は 2005 年 9 月に竣工した。これら 2 つの建物の完成によって、敷地に占める建築面積の比率がほぼ 30%（建ぺい率は 40%）となり、開学当初は広大に思われた校地も 20 年を経て、建築可能面積は残りわずかとなった。

京田辺キャンパスの既存の校舎については、主な建物が開設後 20 年を経過し、一部に防水処理部分の劣化などを原因とする漏水や建物表面タイルのひび割れ、空調機の故障などが起こっているため、インフラ設備等も含めた、キャンパス全体の総合診断を行い、計画的な改修、更新工事を実施する必要がある。

一方、今出川キャンパスにおいては、栄養士法改正に伴って必要とされる実習施設の確保とともに、楽真館、デントン館、心和館など主な建物の電気、ガス、水道など建物内インフラの整備をはじめ施設設備の補修・改修を行った。また、楽真館から心和館に至る給水管の更新および舗装工事が 2004 年度に完了し、つぎはぎだらけであった今出川キャンパスは透水性のカラーアスファルトによって全面舗装された。

この間の改修は、緊急を要する必要最小限のものに限られたが、インフラ設備の老朽化を原因とする事故等の発生を防止することができ、一部ではあるが、実験実習室の改修により、教育研究環境の改善が図ることができた。

また、新聞紙上を賑わしたアスベスト問題であるが、本学でも全学的な調査の結果、栄光館（チャペル、礼拝堂、瞑想室）と頌美館（多目的ホール）の一部に使用が確認されたため速やかに撤去工事を行った。

今後の課題としては、京田辺キャンパスの狭隘化と今出川キャンパスの過疎化の問題を解消し全学部・学科の教育研究環境等の改善のための方策として、2009 年 4 月から学芸学部英語英文学科と日本語日本文学科が、京田辺キャンパスから今出川キャンパスに移転することになったため、それに対応する今出川キャンパスの施設・設備等の整備が急がれる。

また、英語英文学科と日本語日本文学科移転後の京田辺キャンパスの利用計画も合わせて策定・実施していく必要がある。

○教育の用に供する情報処理機器などの配備状況（B 群）

（ア）PC システム、ネットワーク

京田辺キャンパスには、情報処理教室 6 室、自習室 3 室（内 1 室はマルチメディア対応）、AV 教室（eCALL）2 室が設置されている。この他、オープンスペースにも少数台のパソコンを設置しており、パソコン総設置台数は 414 台、学生約 12 人に 1 台の環境を提供している。

今出川キャンパスには、情報処理教室 1 室、情報処理自習室 2 室が設置され、総設置台数 108 台、学生約 10 人に 1 台の環境となる。

情報処理教室の稼働率は、京田辺キャンパス 44.2%、今出川キャンパス 34.7%、AV 教室の稼働率は 47.8%である。授業での利用実態を内容別に分けると、情報リテラシー科目

74%に対し、それ以外の科目（外国語科目や専門科目）は26%である。

PCの適切な設置台数については算定が難しいが、本学では数年前より“10人に1台”を念頭に、整備を進めてきている。京田辺は目標数値には達していないが、両キャンパスとも、授業の集中する特定の時間帯を除けば、特に支障は来たしておらず一応充足している状況であると判断している。しかし、教育における情報機器利用をさらに積極的に推進するためには、さらなる数的増強や質的向上が必要と思われる。

本学の情報処理環境の特徴は、情報処理教室サーバ上に学生ユーザ各自のホームディレクトリを提供している点である。これにより、マルチユーザ環境でありながら、個人の専用パソコンを扱う様な操作環境を提供している。インターネット上に教育・研究用Webサーバ、イントラネット上に授業用サーバが設置され、各種授業で活用されている。

一般講義および演習室すべての教室に情報コンセントを設置し、授業におけるネットワーク利用を可能としている。さらに、一部の教室やオープンスペースに、学生用情報コンセントを設置し、持ち込みパソコンでの自習等に対応している。利用時間においては、情報処理自習室、AV1・2教室、AV3教室ともに9時～19時までとし、試験前（レポート提出時期）等に関しては、使用状況に応じ、1時間程度の延長を行っている。

情報処理教室・自習室の立地条件（一般教室からのアクセシビリティ）、サポート体制（ヘルプデスクの充実）も重要な要素と考え、環境維持向上に取り組んでいる。

（イ）一般教室 AV 機器設備

本学の授業運営に必要な一般教室におけるマルチメディア教材への対応として、ほとんどの教室においてAV機器設備を設置している。

ただし、パソコンを利用した授業への対応としてパソコンの出力を可能とした教室の整備状況が全体教室数の約4割となっている。小教室においては演習科目におけるプレゼンテーション型授業の浸透で移動式の機器で対応可能とはしているが、授業運営において機器類の移動および設置の時間や手間を考慮すると、今後演習室への積極的な整備を目指さなければならないと考える。

今後の拡充計画と耐用年数が過ぎた教室および故障等による更新を含めて年次計画の策定を進めている。

教室規模別 AV 機器整備状況（特別教室除）				
京田辺キャンパス	教室数	PC 出力 対応機器	アナログ 視聴覚機器	その他 (拡声機能のみ)
大教室（200人以上）	5	5		
中教室（100人～200未満）	16	8	7	1
小教室（100人未満）	65	21	44	
情報コンセント付教室	1	1		
合 計	87	35	51	1

今出川キャンパス	教室数	PC 出力 対応機器	アナログ 視聴覚機器	その他 (拡声機能のみ)
大教室 (200 人以上)	2	1		
中教室 (100 人～200 未満)	7	2	5	
小教室 (100 人未満)	12	5	5	
合 計	21	8	10	

2007 年度には全学ユーザ管理システムのリプレイス、2008 年度にはネットワーク通信機器の全面リプレイスを計画しており、より一層のネットワーク環境および PC 環境の向上に取り組んでいる。

○ 大学院専用の施設・設備の整備状況 (B 群) 大学院

大学院研究科の施設・設備は、多くは大学・学部と共用のものである。

京田辺キャンパスでは、文学研究科および国際社会システム研究科があり、大学院専用の施設としては、大学院共同研究室 4 室 (243 m²)、大学院資料室 2 室 (79 m²)、大学院演習室 9 室 (515 m²) がある。共同研究室には、新たに 10 台のキャレルデスクおよび多人数によるプロジェクト等にも対応した設備が設置されている。また、サテライト授業が今出川キャンパスで行われ、大学院専用の演習室 2 室 (42 m²) がある。2006 年 5 月現在の在籍者数は 67 名であり、大学院に必要とされている施設・設備はほぼ充足している。

今出川キャンパスでは、生活科学研究科食物栄養科学専攻があり、2006 年 5 月現在の学生数は 4 人であり、実験を主とする研究科の性格から、それぞれ指導教員の研究室・実験室において研究を行っている。

大学院研究科の施設・設備等も 2009 年 4 月からの学芸学部英語英文学科と日本語日本文学科が京田辺キャンパスから今出川キャンパスに移転することに伴い、再整備が必要である。

(キャンパス・アメニティ等)

○ キャンパス・アメニティの形成・支援のための体制の確立状況 (B 群)

京田辺キャンパスは、周囲に樹木や竹林が繁茂している自然豊かな丘陵地にある。正門から校舎群に至る高低差は、2 機の屋外型エスカレータによって解消され、校舎群に至る最初の建物「友和館」に導かれる。友和館は「コミュニティーセンター」であり、1 階のエントランスホールには華道部による生け花が飾られ、来学者を迎えている。エントランスホールに続いて「コミュニティーラウンジ」があり、格調高い輸入家具が配置され、語らいや寛ぎのゆとりのスペースとなっている。

また、女子大学らしく「花と緑のあふれるキャンパスにしたい」との趣旨のもと、トイレなどに一輪挿しの花を飾るようにしている。栄光会 (父母の会) の寄付による記念植樹

も毎年行っている。

今後とも「花と緑のあふれるキャンパス」を発展させるために、キャンパスを囲む法面への花壇の設置や中庭にあるテニスコートの移転およびその跡地の整備を具体化していく必要がある。また、学生が校舎間を行き来する際に、傘を指さずに往来できるように建物間に渡す屋根の設置も予定している。

なお、昨年度は将来のスポーツ施設設備にかかる整備のための運動用地として約 170 m² の土地を購入した。

今出川キャンパスでは、レンガ造りやレンガ調の建築物が点在し、伝統を感じさせる落ち着いた雰囲気が醸し出されている。1914 年に建てられた「ジェームズ館」(登録文化財)は、2001 年に保存改修工事を行い、大正時代を偲ばせる落ち着いた空間の中に、在学生や卒業生が語らい、寛ぐことができるラウンジ等がある。

キャンパス・アメニティを向上させるために、学生会からの要求や「学生アンケート」などを通じて学生のニーズの把握にも努めている。特に学生会からの要求については、学生部が中心となり、学生会との会見を開きこれをもとに集約した学生のニーズは、それぞれの担当部署で検討される体制をとっている。

施設・設備等の整備計画の具体的な実施計画に関しては、経理部施設課が、学生の要望を受け、前述のとおり常任委員会で提案・審議され、評議会、教授会の議を経て実現がはかれる体制である。学生の要望を実現した最近の例としては、外灯の照度改善、課外活動のためのグラウンド整備、駐輪場の改修などがあげられる。

今後とも、キャンパス・アメニティーの視点を持つとともに学生・教職員等より広く意見を聴き、現状の見直しや、施設・設備の更新・改修等を計画する必要がある。

○「学生のための生活の場」の整備状況（B 群）

京田辺キャンパスは郊外に位置するため、大学の近くには学生が利用する食堂や喫茶店などが多いわけではない。1 日の大半を大学で過ごす学生にとって寛げる場所や、自習施設、食堂、購買などの充実は欠かすことのできないものである。

コミュニティーラウンジは友和館 1 階にあり、高い天井が醸し出す豪華で落ち着いた雰囲気の中に、ゆったりとしたソファが配置され、約 80 人が寛ぐことができる。友和館 3・4 階には食堂（席数総数約 570）があり、通学路の大階段上にかかるブリッジ状の開放的なスペースで、眺望がよく食事時間以外でも語らいや自習の場所として大いに利用されている。コミュニティーセンターとしての友和館にはこのほか、卒業生がいつでも立ち寄ることができる卒業生ルームや生協のキャンパスストア、ブックストアが設置されている。

その他厚生施設として、恵愛館があり 1 階には業者の経営による食堂（席数約 500 席）およびコンビニエンスストア（サークル K）がある。2 階には課外活動の施設、休憩コーナーが設けられている。

自習施設としては、図書館等（閲覧座席数約 620 席）、情報処理自習室（利用台数約 150

席) などがある。

課外活動施設としては、恵真館(体育館)があり、1階にはダンス室、トレーニングルーム、卓球室、2階にはバスケットボールコートが3面とれるアリーナが設置されている。また、屋外にはテニスコート、ラクロス練習場などがある。

今出川キャンパスでは、京都御苑の北側に位置し、交通至便の地にある。京都御苑を散歩などで学生が利用することも多い。今出川キャンパスの図書館は、地下式図書館で地上部分は芝が敷きつめられており、語らいの場として利用されたり、EVE(大学祭)時にはコンサートの会場になったりしている。登録文化財であるジェームズ館には学生ラウンジを設け、ゆったりとしたソファが据えられており、女子大らしく大きな鏡と洗面が据えられている。2階には、卒業生がいつでも気楽に母校に来られるように卒業生ルームも作られている。

学生食堂は生協があるほか、パンの販売コーナーなどがある。自習施設としては、2箇所の情報処理施設(利用台数約60台)や地下式の図書館(閲覧座席数約180席)がある。京田辺キャンパスと同様、生協のキャンパスストアやブックストアが置かれている。課外活動施設としての純正館(体育館)には、アリーナのほか、トレーニングルームが設置されている。

いずれのキャンパスにおいても、昼食時の学生食堂は相当混雑しており、その状況を解消するために他の場所でも食することができるお弁当やパン類の販売にも工夫を凝らしているが、根本的な解決には至っていない。

○大学周辺の「環境」への配慮の状況(B群)

京田辺キャンパス開学(1986年)時の建物建設によって、周辺地域にテレビの電波障害が生じたためキャンパス内に共用アンテナを設置し、該当地域にテレビ電波の配信を行っている。今出川キャンパスにおいても規模は小さいが同様の共用アンテナを設置している。これについては、2011年に現在のアナログ放送から地上デジタル放送への移行が予定されているため、昨年度にテレビ共用設備のデジタル対応改修を実施した。

新たな建築や開発にあたっては、地域住民に対して説明会を開き、地域の理解を求め調和を図りつつ計画を進めている。また、日常的に境界周辺の竹、樹木伐採などの要望に答えている。

いずれのキャンパスでも、自動車通学は禁止している。周辺の違法駐車はあまり見られず、周辺の地域の方々からの苦情は少ない。しかし、京田辺キャンパスでは、定められた安全な通学路を通らず、近道となる住宅街を通過して、交通量の多い市道を横切るものが後を絶たず、危険な上、近隣の方やドライバーの方々から注意を受けることがしばしばである。4月の新年度には、決められた通学路を通行するように数日間、駅等において通学路指導をしているが、その期間が終えると近道となる危険な道を通学する学生が増えてしまう。市道にはガードマンを立てたりしているが、決められた通学路を通るような工夫

（エスカレータの設置など）をして、決められた通学路を通るよう学生に徹底しなければならない。

いずれにしても地域住民の方々とは、良好な関係を保ち、地域の方からの要求には、誠実に対応するよう努めなければならない。

（利用上の配慮）

○施設・設備面における障害者への配慮の状況（A群）

京田辺キャンパスでは、比較的新しい建物が多く学生が利用する主な建物には、入口の段差解消、障害者対応のエレベータが設置されており、障害者用トイレは少なくとも1箇所から数箇所設置されている。

今出川キャンパスでは、古い建物が多く、障害者に配慮した施設・設備等が十分に整っていなかったが、車椅子利用学生の入学を機に学生が主に利用する建物の入口の段差解消（スロープの設置）、エレベータの設置およびエレベータの設置が難しい建物については階段昇降機を設置した。また、必要な箇所には障害者用トイレを設置したが、障害者の入学に応じて対応するだけでなく、今後、学外者の来学をも考慮して整備に努力していかなければならない。

なお、大部分の情報処理教室、自習室に関しては、席と席の間のスペースに余裕を持たせ、車椅子での利用にも支障を来さない様、配慮している。京田辺キャンパス知徳館 C232 教室（情報コンセント付教室）に関しては、基本的には椅子が固定されているが、入口最寄りの最後列のみ、椅子を設置せず、十分なスペースを確保する事で、車椅子での利用に対応している。

（組織・管理体制）

○施設・設備等を維持・管理するための責任体制の確立状況（B群）

○施設・設備等を維持・管理するための学内的な責任体制の確立状況（A群）大学院

施設・設備等の維持・管理は、業務委託業者と連携し施設課が統括している。不測の事故等危険な状態に対処するために緊急対策マニュアルを定め、連絡体制、対策本部等を設置し、機敏に対応できる体制を組織している。

日常の管理は、樹木管理、警備、清掃、ビルメンテナンスなどにおいて業務委託を行っている。樹木管理については、専門造園業者に業務を委託し、樹木の伐採・剪定、害虫駆除等を行っている。警備は24時間体制をとっている。各教室や構内の清掃は、常駐している清掃業者が毎日定期的に清掃し、常に清潔な状態が保たれるよう努めている。電気設備や空調設備などを維持するために中央監視盤の更新を行い、日常的なビルメンテナンスを行

っている。電気主任技術者、その他技能職員、経理部施設課職員が中心になって施設・設備の維持・管理業務に従事している。

昼間の施設・設備の管理体制は、以上のように確立されているが、夜間については担当者が常駐しておらず、24 時間体制の警備員から施設課職員およびビルメンテナンス担当者へ連絡が行われるようになっている。必要な指示はできるが、緊急の場合には間に合わないことも出てくる可能性があり、不安要素となっている。中央監視装置の遠隔監視システムの導入などを今後検討していかなければならない。

情報処理設備および機器関係は、情報システム課が統括し運用管理を行っている。障害時保守については、システムおよび機器導入時に保守契約を締結し、また日常の運用管理については、一部業務委託業者と連携し対応を行っている。

学外からのネットワーク不正侵入および利用については、学外からの通信において通信制御装置を設置し対処をしているが、今後ますます巧妙かつ複雑な手段になると予想されるため、現在の設置機器以上の不正侵入に対する監視および検知の強固なシステムの導入などを検討していかなければならない。

○施設・設備の衛生・安全を確保するためのシステムの整備状況（B 群）

日常的な清掃、ゴミ回収は、常駐の清掃業者が行っているが、薬学部からでる特殊な廃棄物（実験動物の屍体、感染性産業廃棄物、水銀等）は、生活環境の保全と公衆衛生の向上を図るべく諸法規に従い、専門業者にそれぞれの廃棄物を適正に処理するよう委託している。

給水は、水質検査や貯蔵タンクの点検を年 2 回、専門業者に依頼をし、飲み水としての適合性を確認している。雑排水についても市の排水基準に準拠して処理を行っている。薬学部における実験排水については学内の処理施設で処理を行ったうえ、市の基準に達した状態で公共下水に排水している。

食堂を中心に定期的に害虫駆除を行っており、食品の衛生管理についてはそれぞれの委託業者に徹底を依頼している。

両キャンパスとも防火管理体制が整い、発火地点や火災通報箇所を一元的に中央監視盤等で確認できる体制がとられている。万が一、火災が発生した場合は、緊急対策本部のもとに自衛消防本部を設置し、本学防災消防計画に従って自衛消防活動を行う。初期消火班、避難誘導班、安全工作班などの役割を定め、緊急時に備えている。

防犯については、門衛所において出退管理するとともに必要なところには赤外線による機械警備を行っている。また、新しいトイレには、緊急呼出用および防犯用をかねてブザーを備えている。盗難については貴重品の自己管理を徹底させるとともに、学生が多く利用する期間については警備の巡回を増やすなど抑止に努めている。また、新しく改修した京田辺キャンパスの図書館では学生証等による図書館入館管理システムを導入し、入館チェックを行っている。

電気・ガス等のインフラの施設・設備をはじめ、エレベータ、エスカレータ、自動扉等については故障によるトラブルを最小限にとどめるため、専門業者による定期的なメンテナンスを行っている。

その他、地震などの自然災害などについては、危機管理マニュアルを定め、緊急対策本部を設置し、必要な対策を講じるようになっている。

非常時にいかに対応すべきか、というマニュアルは整備されているが、現実に適切に対処するために、訓練等の実施が不可欠となる。今年度、京田辺キャンパスでは消防訓練を実施したが、防火意識を常に維持し、必要な時に適切な対応をするために教員をはじめ職員、学生による訓練を今後も定期的に行う必要がある。

- 実験等に伴う危険防止のための安全管理・衛生管理と環境被害防止の徹底化を図る体制の確立状況（B群）大学院

実験等に伴う危険防止のための安全管理・衛生管理と環境被害防止については、指導教員のもと厳重に行われている。